

日常生活の終末的な次元

年間第33主日 B年

私は子どものころ、父から数を数えることを習いました。一、十、百、千、万、……。いつまでも続くので、「いつ数え切れるの？」と尋ねました。すると、数には終わりがなく、無限であることを教えてくれました。無限という言葉を知ると、それを使っていろいろのことを尋ねてみました。例えば、「宇宙は無限ですか？」と。現代の学者たちは、宇宙はビッグ・バンによって始まったと言います。宇宙は数百万年にわたって形づくられました。きょうの一日は次の一日に中断することなく続いていきます。もちろん、死ぬ時その人の日々の歩みは終わります。それでも日々の連続は、数のように無限に続くのでしょうか。学者はそれについて何らかの答えを持っているでしょう。しかし、新約聖書によれば、主イエスが約束された通り、威光に満ちて、再び来られる時、時の歩みは終わることになっています。それは終末的なことで、きょうの福音のテーマは終末論に属しています。

終末論とは、私たちの究極的なこと、つまり、死、裁き、地獄、栄光ということについての教えで、毎日、私たちの霊的な体験にならなければなりません。人は生まれた日から死に始めると言われます。なぜなら、この世に生きる日数が定められているので、生まれたその日も寿命から引かれていくわけです。ですが、それを知っているというだけでそれが霊的な体験になるとは言えません。申し上げたいのは、毎日、み旨を探し、それを見いだし、それを実行に移していくという体験のうちに終末的なことが含まれているということです。それについて少し考えてみましょう。

私たちは、自分の生活のうちに神のみ旨を認めることができます。例えば、私はみ旨によってメキシコに生まれ、イエズス会の学校で勉強し、イエズス会に入り、日本に派遣されて参りました。そして今も毎日、生活の中に神のみ旨を探し、見いだし、それを実行に移すことができます。皆様お一人おひとりも同じことが言えると思います。それは信仰のうちに言えることです。私たちは毎日の生活の中で、人や出来事に会いますが、それらを信仰の目で読み取ることが学び、内なる聖霊の囁きに注意を向けることができれば、神が私たちから何を期待しておられるかを見い出すことができるようになります。そうすることが、どんな使命のために私がこの世に送られたのかを知る秘訣となります。それこそ私たちの道、実は唯一の真の道、その道を歩むことは豊かに人生を生きることになります。主の言われたことですが、ご自分がこの世に来られたのは私たちが単に生きるためではなく、豊かに生きるためです。主ご自身がその豊かさを生きられ、その道を歩まれました。主が「私は道であり、真理であり、命である」と言われたのは、実は、ご自分がなさっていたことを言葉に移し換えただけです。すなわち、慎ましくみ旨を探し、見つけ、それを実行に移していくという生活であれば、私たちは主に倣って生き、道、真理、命そのものである主ご自身を映し出していきます。そうした生活は、よく磨かれたダイヤモンドのように、多くの側面をもっています。その幾つかについて考えてみましょう。

まず初めに、そうした生活によって私たちは、日々刻々向かっている永遠と結びつけられます。神のみ旨の内容は私たちが作り出したものでも、自分の考えの投影でもありません。それは私たち自身を完ぺきに超える神ご自身からのものです。私たちがそれをこの世において受肉するという目的で、神は永遠のうちに定められたのです。そうした意味で、み旨に従って送られる人間生活は、究極的なものの体験を含んでいます。その理由を明らかにしましょう。

み旨としていただいたものを生きるということは、新約聖書において、自己放棄、自分を捨てることであると言われていています。ほかの言葉で言えば自分に死ぬということです。み旨を絶えず求め、見つけ、それを行っていくことは、一種の死の体験です。当然、その死は豊かに生きることになります。一方、そうした生活には他の側面が伴います。つまり、一種の裁きです。カルワリオの丘で行われた裁きの延長です。そこに立てられた十字架はサタンとサタンの見方であるこの世の精神、金銭、権力、名誉、快樂を生活の中心に置くことの裁きを意味します。主イエスの隠されていた勝利、ご復活によって明るみに出される勝利を表す十字架による裁きです。そうした裁きは、天におられる父のみ旨を探し、見いだし、それを行っていく私たちの生活に延長されます。主イエスの隠れた勝利も、御父への従順の生活も、私たちの生活に延長され、私たちの復活に現れるでしょう。その意味で、私たちの毎日の生活は、命をもたらす死の体験であり、私たちの復活を伝える裁きなのです。人間存在の究極的な次元の体験です。

主イエスの御昇天の後、初代教会の中には、栄光に満ちたイエスの再来は数年内にあるのではないかという疑問が起きました。その疑問は、いつ時が終わり、終末的なことが始まるのかというものでした。主がおいでにならないので、その期待は時がたつにつれて、初代教会の根本的な悟りに変えられていきました。つまり、神のみ旨を探し、見いだし、それを実行していく生活のうちにすでに終末的なことが行われているという自覚です。主イエスの再来はこのように準備されていきます。

したがって、私たちの日常生活において終末的なことを生きるということは、人間存在の究極的な次元の体験と言えるのです。

J. E. ペレス・バレラ S.J.